

第11期東京都生涯学習審議会

第4回全体会

会議録

令和元年12月19日（木）

午後6時04分から午後8時02分まで
都庁第二本庁舎31階 特別会議室23

○出席委員

笹井 宏益 会長

酒井 朗 副会長

青山 鉄兵 委員

土屋 佳子 委員

永島 宏子 委員

野口 晃菜 委員

林 幸克 委員

広石 拓司 委員

松山 亜紀 委員

第11期東京都生涯学習審議会 第4回全体会
会議次第

- 1 開会
- 2 議事
 - (1) 事例紹介「EU及び北欧の若者支援の取組について」
両角達平先生（文教大学生生活科学研究所）
 - (2) 審議
- 3 今後の予定等
- 4 閉会

第11期東京都生涯学習審議会第4回全体会

令和元年12月19日（木）

開会：午後6時04分

【生涯学習課長】 ただいまから第11期東京都生涯学習審議会第4回全体会を開催させていただきます。

本日は、9名の委員の皆様が御出席予定となっております、山崎委員は御欠席との御連絡でございます。また、松山委員につきましては遅れての御出席という予定でございます。

それでは、本日の資料の確認をさせていただきます。机上に次第、座席表とタブレット端末を置かせていただいております。

本審議会での説明に関しましてはタブレット端末を使用したペーパーレス会議とさせていただきます。本日の審議資料は89ページまでとなっております。

本日は、「EU及び北欧の若者支援の取組について」、文教大学生生活科学研究所研究員の両角達平先生に事例報告をお願いしております。

両角先生は、若者政策やユースワークについての研究者として御活躍をされていらっしゃいます。また、前回御報告いただきました中学生・高校生を対象とした施設の職員との交流活動にも参加をさせていただいております、現場の状況もよく御理解いただいております。

今回は、スウェーデンを中心としたヨーロッパにおける「ユースワーク」の変遷について、そして若者を支援する施策の現状と課題についてお話をいただきまして、今後の審議の参考とさせていただきたいと考えております。両角先生、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、ここから笹井会長に議事進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【笹井会長】 今日は、ただいま御紹介のありました両角先生に、北欧やEUのユース

ワークについて1時間程度お話をさせていただいて、その後、質疑応答、意見交換をしたいと考えています。

まず初めに、EU及び北欧の若者支援の取組について、両角先生から御説明をいただきます。よろしくお願いいたします。

【両角先生】 両角と申します。長野県生まれで、静岡県の大学に行って、それからヨーロッパに行って、最近東京に帰ってきて、研究員等をやっています。今は文教大学の生活科学研究所、ほかの大学等でも非常勤講師をしています。通訳や講演活動もしております。スウェーデンの大学院では国際比較教育という分野を学びました。その方法論で、ヨーロッパにおけるユースワークなどの若者政策、あるいはスウェーデンにおける若者参加やユースワークというものを日本との比較検討という形で研究をしてきました。

それで、今日は、北欧と言いましても、特にスウェーデンにおける若者支援の取組について話します。僕の研究の関心というのはどこから来ているかという、僕自身も大学生のときからいろいろと活動していく中で、どうしても自分が社会に参加しているというか、そういう実感がないと思っていましたし、政治的な関心もそうですけれども、それ以外にも自分の声が社会に届いているのか、何かしら影響力というものが発揮できていないとずっと感じていました。それは多くの日本の若者が感じていることであって、内閣府の調査等でも明らかになっています。国際的に見ても、日本の若者は自己肯定感が低い、自分が参加したことによって社会に影響を与えられると感じる若者の割合が非常に少ないです。その理由をスウェーデンの政策を参考にする、あるいは日本におけるその原因は何なのかというようなことを研究しています。

まず、ヨーロッパ全体の中で今ユースワークの現状がどこにあるのかというのを確認させていただきたいと思っています。

日本で2009年に子ども・若者育成支援推進法ができましたけれども、そのときに参考にしたのはヨーロッパの若者政策でした。宮本みち子先生などがヨーロッパにおける若者政策の展開などを参考にしました。

ヨーロッパで若者政策が浮上した背景、もちろん各国で事情は異なるのですが、そこで認識された若者にまつわる社会的な問題というのをここに挙げています。若者の失業問題、高学歴化などいろいろあるわけです。

特に重視されたのは、資料にある移行期の複線化、多様化と言われています。何かというと、これまで若者の生き方というのは、線路のように一本の道であったわけですがけれど

も、それが立ち行かなくなっていくようなぐらいグローバリゼーションなどの影響が出始めているということで、若者の生き方が複雑化したとされています。

それで、2001年にEU若者白書というのができて、そこで若者の積極的シティズンシップ、いわゆる若者の参画、市民性など、いわゆる経済的な自立だけではなくてそういうものをつけていこうという流れがありました。

これを参考に日本も若者政策をつくることになって、日本では大体この辺で終わっているわけです。

その後のヨーロッパについて確認したいと思います。

まず、「ヨーロッパにおける外国生まれの人口の比率」は、非常に高いです。特に、イギリスやドイツとかが高いのではと思われそうですが、実は、スウェーデンが一番高いです。15パーセントぐらいいるというふうに言われていて、スウェーデンに行くと分かりますけれども、いわゆる白人で金髪のスウェーデン人みたいな人というのは意外と少ないというのがよく分かります。人口当たりの比率で見ると非常に高いです。ヨーロッパでは外国生まれの人口比率が非常に高いです。これはスウェーデンに限らず各地で起きている人口の移動の問題の一つです。それによって民族的な多様性が非常に高いわけですね。

その中でなぜEUや欧州委員会がなぜ若者の社会参加が必要と言っているのか、その理由というのがこのスライドです。

人権だからというのが一つですね。あと、子供・若者が排除されなくなるというのが二つ目。意思決定にかかわることによって本人たちのニーズなどが反映されるわけです。三つ目が、これは教育、価値観などに近いのですが、本人の能力が高まる、自信が持てるようになる、あるいは規範意識、抱負を抱くようになったりすることですね。あとは、政策、公共サービス自体が良くなるということと、そして五つ目が、積極的に社会参加をしていくためには訓練が必要、だから若者の社会参加が必要なのだとヨーロッパでは考えられているということです。

そして、この若者が社会参加をするために民主主義を教えること、それを怠ると「若者は政治に対してひがみっぽくなり、投票率は下がり、政治家、政党、政治的な若者団体への不信感が募る」と、「さらに、研究によると、市民教育の経験がない若者は、同調圧力により極端な思考に陥り、暴力的な政治活動をしやすくなる」とされています。こうした危機意識があります。今、極端な主義主張をする排他主義的な政党や、そういうムーブメントが高まっていますが、そうしたことに對抗するために、熟議型の民主主義というの

を推進していくことによって良い民主主義社会をつくっていかうということです。それがヨーロッパの若者政策全体の思い、理念だと思ってください。その中で、ユースワークが非常に期待されています。

こういう流れで若者政策というものがEUレベル、あるいは欧州委員会レベルでできています。

スライド12を御覧ください。2001年、ヨーロッパの若者白書が出されます。ここから若者政策が展開されていきます。その中で2010年あたりから「ユースワーク」という言葉が出てきます。ヨーロッパの若者政策の中において、ユースワークが主要なアクターを担うという流れが来ました。2009年、「青少年分野における欧州の協力についての新たな枠組（2010-2018）」が欧州理事会で採択されます。それから、第1回、第2回と、欧州ユースワーク大会が開催され、宣言が採択される中で、ヨーロッパにおけるユースワークとは？ということを考えることが具体化されていきました。

このユースワーク大会というのがとてもおもしろいのです。各国から500人ぐらいがブリュッセルやアントワープに集まって、ユースワークとは？という話をします。その中で、ユースワークの価値や、その原理を確認してきました。

2010年と2015年と開催し、5年に1回ですので、今度2020年です。

第1回と第2回の概要についてはスライド13の表になります。

第1回的时候は、まだヨーロッパでも「え、ユースワークって何ですか」というところがあったので、これまでの歴史を整理していったわけです。もともとユースワークは、イギリスから始まりましたが、例えばドイツであれば社会教育の枠組みなど、各国それぞれの枠組みがあったわけです。そのため共通言語をつくることによって政策の中で優先してもらおうとし、「ユースワーク」という言葉を使いました。

第1回、第2回の大会宣言についての比較考察をスライド15に掲載しました。

第1回では、ユースワークの実践の質の保障と社会的認知を高めるために様々な政策に取り組もうとしています。ユースワーカーの形態について、有給ワーカーも必要だし、ボランティアも大事だということも話されました。また、緊縮財政下におけるユースワークについても話し合われ、イギリスが特にひどかったわけですが、新自由主義的な政策をしていく中で、福祉セクターへのお金は削られていくという流れの中でユースワークも被害を受ける中で、「協力関係においては力の弱いパートナーとなる可能性がある」とされています。

第2回、2015年のときは、ユースワークがなくなるのではないかととても警戒しています。例えば「ユースワークへのアウトカム重視の傾向への懸念」を示しているわけですね。いわゆるインパクト評価など、ユースワークの効果として、例えば成績や就職率などへの影響を図ろうとされた。それによって、本来的なユースワークというものができなくなっていくという懸念があります。

ヨーロッパのユースセンターなどで「利用者はどうやって数えていますか」と聞いたのですが、スウェーデンなどでは基本的に目視で、「まあ50人ぐらいかな」という感じです。

スウェーデンでは、あえてそうしているというふうに言っています。なぜかという、ユースワークの価値は利用者数とかではないということを明確にしているからです。第2回の宣言では、そうしたアウトカム重視の傾向への懸念や、ユースワークに資することでもたらされる帰結などを強調して言っていました。

この宣言の比較研究を僕がしたのですけれども、これを見て思ったのが、ヨーロッパレベルでもユースワークセクターというものが非常に厳しい状況にあるということが明らかになっています。

おもしろいのがユースワークの若者対象像です。第1回に比べ、第2回ではいろいろな若者が出てきているのですけれども、例えば、ニート、健康リスクの高い若者、過激主義の若者とか、社会的排除のリスクの高い若者などと、かなり具体的になっていて、かつ、いわゆる特別なニーズのある若者というのも入れていこうというふうになっています。例えば連携先には刑務所や就労支援施設も入っています。メニューはいろいろ持とうという姿勢はあるのですが、一方で、コアなユースワークの価値というものを失わないようにしようとしたのが第2回なのかなと思いました。それが今のヨーロッパのユースワークという感じです。

ヨーロッパにおいて、ユースワークは、ユニバーサル型とターゲット型に二極化していると言われていています。

スライドの10になります。ユニバーサル型というのは、全ての人に開かれたユースセンター、若者が来られる社会教育施設ですけれども、いわゆる健全育成に近いものです。福祉国家的ですので、北欧はユニバーサル型です。60年代、70年代のイギリスのユースワークもユニバーサル型です。その中では、若者の社会参加を大事にしましょうと言われていました。

現在はターゲット化が進んでいます。それは先ほどの緊縮財政の影響もあるのですが、特別なニーズを持つ人に支援が傾倒していつている感じです。

こういう流れがある中で、デンマークとフィンランドの北欧におけるユースセンターやユースワークの取組とイギリスの取組を比較して、北欧はまだこのユニバーサル型が残っているという研究があり、そのことを10年ぐらい前に聞いて、僕はスウェーデンに行きました。

ちなみに、ここで言っている「ユースワークは」（スライド 11）というこの定義は、「In Defense of Youth Work」という、イギリスにおける本来的なユースワークの活動を守ろうというムーブメントに関わった人たちがつくったユースワークの定義です。

スライド 16、「スウェーデンという国について」です。スウェーデンは北欧にあります。人口は1,000万人弱なので、東京都より少ないです。財政規模も東京都と同じぐらいだという話を聞いています。国土は日本の1.2倍あります。

通貨はスウェーデン・クローナです。首都はストックホルムで、スウェーデン語が公用語です。ストックホルムは、ここに93万人とありますけれども、いろいろな指標があつて、大体200万とか300万とか、そういう指標もあります。

スウェーデンといえば、国民の幸福度が高いなどで有名ですが、実際いろいろな国際ランキングでかなり上位に位置しています。SDGsでもそうですし、男女格差レポートも非常に高いです。汚職認知数、いわゆる汚職が非常に少ないということでも有名です。一方で、ビジネスというか、イノベーションなどそういうものでも非常に良い数字を出しています。高福祉・高負担なのでビジネスはしにくいのかと思いましたが、そうでもないという国です。国の評判ランキングでも1位です。僕のお勧めは、この世界若者幸福度調査というものですが、これでも1位です。

なぜかという、スライド 19 ですが、スウェーデンは、そもそも進歩的な価値観が強い国だからという世界価値観調査データがあります。スウェーデンはグラフの右上に位置しています。自己表現的価値観と世俗合理的な価値観が非常に高いからスウェーデンはここに位置付きます。

日本は中央の上に位置付いています。縦軸はいわゆる無宗教の国などが上に来る傾向にあります。スウェーデンと日本は、両国とも宗教はありますけれども、宗教的関心が社会に与える影響は少ない国です。

一方で、生存的価値観、自己表現的価値観という横軸で見ると、スウェーデンは自己表

現的価値観というのが非常に高くなっているということです。

次にスウェーデンの若者について紹介します。スウェーデンの若者は、人口が1,000万人で、13～25歳の若者が150万人というふうになっているので、約15パーセントです。海外生まれの人が多いです。84パーセントがスウェーデン生まれで、それ以外の人が15～16パーセントいます。

12～15歳の子供のうち約7割が地域のクラブ活動や協会活動に週に1回程度参加しています。ボーイスカウト、ガールスカウトなどの活動をしている人が多いようです。ゲームが大好きです。“おたく”が多いです。また、国際調査ではないのですが、読書活動も盛んです（過去半年の間に図書館を利用した若者が64パーセント）。16～18歳の55パーセントが夏休みにバイトしています。

スウェーデンの若者といえば、今世界が注目するグレタさんがいます。グレタさんのような子が出てきた背景、その出現を受け止めるような社会というものを考える参考に、この後のスライドの話は繋がると思っています。

グレタさんだけでなく、社会への意識が高いというのは投票率にもあらわれています。去年の投票率が87パーセントでした。日本は7月の参議院議員選挙が48.8パーセントでした。18～24歳の投票率は84.9パーセントなので、ほぼ85パーセントです。日本の10代の投票率は約32パーセントですので、社会参加意識が非常に高いということが分かります。

投票率も戦後ずっと高いです。戦後の投票率は平均82パーセントでした。

投票だけではなくて、社会参加の意識が高いということが様々なデータから明らかになっています。例えば党员であるという若者が5パーセントいます。地域の意思決定者に意思表明する機会があると感じている若者、これが16歳から19歳の若者で2割、20歳から24歳の若者で15パーセントです。あと、自分の関連のある問題に影響を与えたいと思っている人が45パーセントいます。また、少なくとも一つの協会・クラブ活動に属する若者の割合というのが6割から7割います。今日はここがキーになると思っています。これこそいわゆるユニバーサルなユースワークかなと思っています。

若い政治家も多いのですが、スウェーデンは18歳の国会議員もかつて出しています。フィンランドの女性、34歳で大臣です。スウェーデンは2014年に27歳の大臣を出しています。

さっきの世界若者幸福度調査というもので1位になっています。スライド28でその内

訳を見ると、「市民参加」「教育」などで差がついています。

北欧では、他者を基本的に信頼できるというデータがあります。社会関係資本と言うのですが、これも非常に高いので、市民社会が機能しているというデータがあります。

では、実際、教育・社会教育で何をやっているのかという話をします。

PISA、国際学習到達度調査の成績は、スウェーデンは良くないです。2000年から始まっていますが、スウェーデンはどんどん下がっています。スライド32を見ても分かります。2015年で少し上がっていますが、フィンランドはずっと高いです。日本はある程度高いです。僕が見ているのは社会参加についてなので、PISAの点数は参考にならないです。

スウェーデンの学校教育は学費がかからないというのは有名ですね。公立・私立にかかわらず学費はかかりません。給食費、交通費、社会見学の行事も親が負担する必要はありません。大学に限っては、最近、EU圏外の学生は有料になりました。奨学金がもらえません。返還不要の給付型で4万円がもらえます。ユニバーサルな教育政策のようですが、実は学校教育政策においてはいろいろと問題があるのではないかとされています。市場原理を学校教育に持ち込んだことによってうまくいかなかったという話がスライド33の(2.)になります。

スウェーデンの若者は、高校を卒業してすぐに大学に行く若者は13パーセントしかいません。その後、最終的に生涯の大学の進学率となると高くなるのですが、高校を出てすぐ大学に行くというのはあまり一般的ではないということが分かります。

では、学校においてどういうふうに民主主義を教えているのかという話です。まず、学級会、生徒会があります。ここが非常に力を持っていて、学校の行事もそうですけれども、修学旅行とか、あらゆるそういう活動というのを生徒が参画して決めることができます。給食委員会という委員会があり、給食がまずかったり、ジャガイモが固かったら「ジャガイモが固い」と伝えることができたり、こうしたことも民主主義的に大事だというふうに使われています。あるいは、テーマ学習や、学習方法を自分でデザインすることもできます。また、学校で模擬選挙もやっています。なぜなら、自分の学びの主体は自分であって、その自分の学習に対して影響力を持つということが大事だと考えられているからです。

スウェーデンにおける主権者教育についてです。教える内容は、まずは民主主義の価値、次に、民主主義の知識、そして三つ目が、民主主義の具体的な技能です。民主主義をどの

ように実践するのかという技能を教えています。

学校選挙、この取組は有名です。スウェーデンの特徴は、議席を持っている実際の政党に投票し、その投票結果も公開します。この学校選挙は生徒会を中心に運営しています。大事なのは、政治家と政党青年部の人たちを招いた討論会を投票の前後でやるということです。ただ単に調べ学習して投票するだけではなくて、政治家の話を聞いて行きます。

議席を持っている政党の人たちを学校に呼ばなくてはならないという決まりになっています。日本ですと、政党の中立の問題など言われますが、全ての政党の人たちを対等に、平等に扱うという、要は主義主張による差別の禁止という方法で平等に扱うことで中立を保つと言われていています。

選挙小屋というものがあり、選挙期間になると町の中にブースのようなものが設置されます。ここで人がプレゼンテーションし、みんなで聞いて、話し合ったりできるんです。以前、見た光景ですが、子供たちがある党の選挙小屋の前でコーヒーを飲んでいたので何をしているのかと尋ねたら、学校で模擬選挙をやるからこの選挙小屋に行つてどの政党がどんな主張をしているのかというのを調べてこいという社会科の授業の宿題が出て、調べ学習をしていたということです。

ユースワークの話をしします。スライド42は、スウェーデンのユースワークの範囲を表しています。今まで話をしたのは、この基礎学校における学級会とか生徒会の話で、右側です。左側は社会教育、余暇です。スウェーデンでは「Fritid」という、フリータイムという意味の言葉を使います。ここで起きていることが非常にたくさんあります。その中でも、ユースセンターなどを利用している若者というのは、全体の15パーセント未満ぐらいです。多くは若者団体に所属して参加しているのです。さっきの数字でも見ましたけれども、5～7割ぐらいの若者が何かしらの活動をしています。

その若者団体とは？という話ですけれども、「フェレーニング」という言葉があります。これはアソシエーション、協会という意味です。その協会が三つあって、経済、利益、そして非営利とあります。非営利フェレーニング、いわゆるNPO、個人の利益を追求しないスポーツ団体とか禁酒団体などの活動をしていて、かつ若者によって構成されるものが若者団体というふうに言われています。特に明確な定義ができていないのですが、若者団体というのは、若者が民主主義を学ぶ中で非常に重要な役割を担うというふうに位置付けられています。市民社会にとって重要な一部であると言われていています。

若者団体はどんな団体があるのかという図がスライド44になります。「Hobbies」、

「Religions」などと分類されています。「Interest groups」とありますが、僕の理解では、例えば「Hobbies」だったら、ゲームや、日本語を勉強するなどグループで余暇活動を共有している人たちです。いわゆるサークル活動です。「Religions」だと、例えばYMCAなどのいろいろな教育団体があります。キリスト教など、いろいろな宗教の宗教団体に属しながら非営利の活動をしている、そういう人たちがお金をもらって若者団体として活動しているということです。

具体的な活動についてですが、スウェーデンにはユースカウンスルというものがあります。これは若者協議会と訳していますが、この活動が非常におもしろいです。若者が地域社会に何かしらの影響を与える活動をしています。100人ぐらいの若者から構成されるのですが、その人たちがやりたいことを話し合っ決めて、そして実行しています。例えばスライド45ですが、公共交通機関を時間限定で無償化したり、ウオーターズライド祭りを開催したり、地方選挙において16歳選挙権を導入しようと提案したりなどです。ここには毎年350万円の予算があるので、101人の若者たちが話し合っ決めていています。若者が地域に影響を与えることが価値とされているのでこうした活動があります。

生徒会の全国組合も同じようなことをやっています。例えば、学期ごとに成績が出た後に、「今回成績が出ましたけど、それがちゃんと評価されていると思いますか」というようなアンケート調査をして、不服があったら言えるようにしているなども生徒会組合の伝統的な活動です。生徒には正當に評価される権利があるからということです。予算規模は約3億円です。代表が21歳で、正規職員は45人ぐらいの若者たちです。スタートアップのような規模です。ほぼ政府からの補助金で活動できています。ここの代表が政治家になるなど、活動で民主主義を学んでいます。

スライド47が政党青年部ですね。それぞれの政党の若者支部みたいな感じですが。日本だと40代でも青年部に所属しているなどという話を聞きますが、スウェーデンは上限30歳です。下は13歳から入れます。青年部と本部の主義主張は若干ずれることがあるらしいです。同じ社会民主党とか穏健党でもやはり若い世代の利益と上の世代の利益というのは相反することがあるので、若い世代にとっての利益は何かということを主張して政策バトルをしているそうです。そうすることで本部の政策をより若返らせるということも起きているということです。

ここは政治家のキャリアステップにもなっていて、例えば、スライド48ですが、グスタフ・フリドリンという2014年に33歳で教育大臣になった人です。この人は11

歳から環境・緑の党で政党青年部に参加していました。国政選挙で19歳で当選です。その後、彼は「議員が一生の仕事であってはならない」と言って議員を辞めました。ジャーナリストになって、その後また政界に復帰。2014年に環境党共同代表を務めて、教育大臣になっています。明らかに若者が次の世代を担える仕組みができています。

スライド49、ユースセンターについてです。スウェーデンの若者の13パーセントぐらいの若者がユースセンターを利用しています。スウェーデン語で Mätplats (モットプラツ) といって、Meeting Place という意味ですが、交流・出会いの場、集いの場とい、もともと20世紀初等にセツルメントとして立てられたところが起原になっています。ヨーロッパはセツルメントムーブメントがあちこちであったので、スウェーデンも同様でした。ただ、若者ばかりが集まって、セツルメントなのになぜか若者しかいない、これは実際にはユースセンターだなということ、ユースセンターになりました。全国に1,500施設ぐらいあると言われていています。3,700人の職員がいます。職員の形態というのは、余暇リーダーというのが一つ、これは資格としてなっています。スライドには「社会教育士」となっていますが、資格化されていないので、「社会教育者」です。あとは、インターン、パート、ボランティアの人がユースワークに関わっています。

日本からの視察者が「どうやったら子供・若者の参画を促せますか」という質問をユースセンターの人に聞きましたら、「何らかの一部であることが大事だよ」と答えていました。首尾一貫性感覚というのがあって、それというのを感じるようになったら参加しやすくなるなどと答えたりしています。日本だったら、そこで自分が必要とされている、そのコミュニティに所属しているという帰属意識などが感じられる、僕はそれがいわゆる社会への影響力を高めるということなのかなと思っていますが。

スライド52、ヨーロッパで一番大きいユースセンターと言われているのがこのフリースヒューセットというところ。ここは1984年にYMCAの支援のもとつくられたユースセンターになります。2万4,000平方メートルの広大な敷地です。スケートボードパークがあるのがすごいですと思います。バンドセンターもあります。このビルディングの3分の1ぐらいの建物がこの奥にあって、その隣にももう一つ建物があって、その隣にこのスケートボードパークがあってとすごく大きいところです。ここはユースワークの総合商社と言っていますが、余暇活動を支援するユースワークと学校・教育プログラムもあります。また、ソーシャルワーク、いわゆる社会福祉的なアプローチ、就労支援、企業支援も行っています。

ユースカルチャー、活動は、スポーツ、音楽、ダンス、劇活動などできます。若者発の若者文化なので、いろいろな活動に自分たちで参加してだけでなく、若者自身発の若者の文化そのものをここで形にしていくということで、ユースカルチャーという言葉が大事にしているということです。

スライド54は創設者のアンダーシュ・カールベリィの遺言です。若者を信じることをとにかく大事にしていた彼の考え方です。やはり若者が非行に走るというのは、自分のモチベーションなどに向き合えないような環境になるからそういうふうになったにすぎなくて、本人がもともと悪いとかそういうわけではないということをお大事にしている。これがフリースヒューセットでも今でも大事にされている理念です。

ソーシャルワーク的なユースワークも様々行っていますが、フリースヒューセットで特に有名なのが「Lugna Gatan(ルグナガータン)」というプロジェクトです。これは若者がいるところにアウトリーチしていく、デタッチドユースワークというものです。ストックホルムなどの都市ですと、地下鉄などにいろいろな若者が集まりますが、そのたむろしているところにこちらから行く、そこで関係性をつくっていくということをしています。非行予防的な活動ではなく、社会関係資本というか、信頼関係づくりをベースにしているということです。あるいは、「クレディブル・メッセンジャー(Credible Messenger)」と書いてありますけれども、同じように昔、たむろしていたような人たちをあえて雇って、ここで当事者の力を出してもらってデタッチドユースワークに取り組んだりもしています。

ほかにも、女子の利用率が非常に高いユースセンターというのがスライド57のレオパーデンです。

ここは文化と民主主義というキーワードをお大事にしていました。アンティークの、おしゃれな、ちょっとハイカルチャーな、厚い本とかが寄付で集められて置かれています。

なぜかという、そういう文化資本に触れるということがやはりなくなっていることが多いのではないかと、だから触れてもらうためにこういうものを置いてやっていると。このユースセンターを運営している女性の方がもともと本を読んで自分の生き方が変わったという経験から、「文化はすべてを変える」というコンセプトを持ってやっているとことでした。

もう一個おもしろかったのが、スライド60の若者の家というユースセンターです。ここには専門職、ユースワーカーがいません。若者支援をやっている人を雇わないで、若者団体が運営しているユースセンターでした。19歳のベンジャミンとダビッドが団体の理

事、団体が各部門に分かれていて、いろいろな活動に取り組んでいました。

ベンジャミンに「民主主義って何ですか」と聞いたら、「自分の声を聞かせることができ、影響を与えることができることです」と、ここでも「影響」という言葉を使っていました。なぜそれが大事なのかを尋ねたら、「社会が良くなっていくためには変化が必要で、変化するためにはいろんな人がいろんなことを考えます。たくさんの人を考える人もいれば、ちょっとのことしか考えない人もいます。しかし、少ない人が考えるだけでは、良い社会にはなりません。多くの人々の考え方が反映されたほうが良い社会になると思っています」と答えてくれました。自分の影響力を高める、いろいろな人と一緒に考えていく、この考え方は、これまで話したことすべてに一致していると思っています。これがまさにスウェーデンの若者の民主主義の強さかなと思います。

では、なぜ北欧はユニバーサルなユースワークが可能なのかと考えると、やはり民主主義を基盤にしたグループ活動が盛んということが一つあるのかなと思います。

もう一つ、大人も若者も十分な「余暇」があるからだと思います。

スライド69、OECDの「より良い暮らし指標」という調査では、日本は国際的に見て37カ国中34位のワーク・ライフ・バランスな国であると言われていています。1週間当たり50時間以上働いている労働者の割合が出ていますが、日本は23パーセント、スウェーデンは1.1パーセントです。非常に大きな差です。大人があまり働いていないというのもあるんですね。

スライド70、その調査に帰宅時間の比較があるのですが、スウェーデン人男性は大体午後5時に家に帰ります。女性は3、4、5時、この辺が多いです。日本人の男性は夜9時、10時になっています。女性は家にいるという人が多いです。専業主婦が日本は23パーセント、スウェーデンは、1.数パーセントです。この差が大きく出ています。つまり、大人も自由に余暇活動ができるのです。スウェーデンは国民の生涯学習参加率がEUでトップレベルです。いわゆるスタディサークル、3人集まったらできる勉強会というのですが、それが非常に盛んです。これは170万人参加しています。スウェーデン、人口が1,000万人なので、参加率が高いです。若者団体とスタディサークルはすごく似ています。若者団体は若い人によって構成されているだけで、大人になるとスタディサークルで活動します。大人を見て、若者もやるようになるということが起きているのかなと思っています。

そして、ユニバーサルな若者政策があることがやはりこの北欧のユースワークを支えて

いると思っています。

スライド73ですが、スウェーデンの若者政策の分野というのはこの五つから成っています。日本では、若者政策は就労、教育などが非常に多いと思うのですが、スウェーデンは政治、余暇が入ってきます。政治というのは、やはり若者の影響力を高めていくということをとにかく大事にしようと、一貫してやっているということです。就労して、社会的に自立していくことも大事ですが、余暇の時間を確保して、学校へ行く、家庭形成もそうですし、政治的な参加も含めて、生活を充実させるということの意味しているのかなと思っています。それと、「若者は社会の問題ではなくて社会のリソース」という認識があるということです。若者団体への助成金をとても出してまして、約30億円の助成金を2014年には100団体以上の子供・若者団体に出しています。日本でやっている子どもゆめ基金は15億円です。人口10分の1のスウェーデン1国ですから、非常に多いです。若者団体を意見聴取のパートナーとして位置付けてもいます。

スライド75です。スウェーデンでは、若者政策を整理する中で、若者へのまなごしを転換させてきました。例えば、以前は大人が若者を社会の問題と見ていましたが、「若者のことに口出すなんて私たちどうなの？」というふうに大人自身の目を疑い始めました。若者を問題ではなくて社会の「資源」とみるようになった。消費化する若者たちへの政策とありますが、社会が消費主義化していく中で、若者たちが自分のやりたいことができなくなっている、人生を決められなくなっている、そのことに対して、若者団体などの活動に資することで彼らのやりたいことを支援し、消費化する若者たちへの対策としました。この辺りから若者団体への補助金が出されるようになり、若者の社会へ対する影響力などが重視されるようになってきました。

スウェーデンのこうした対応というのは、次のように理解ができるかなと思っています。ステファーン・バルトリーニという人が書いた本で、これはアメリカの話なのですが、1972年から2004年までで、1人当たりの給与水準と平均労働満足度が、全然相関していない。給料は上がっているが、満足度（幸福度）は変わっていないというデータです。

何で幸福度が上がらないのか、その理由を彼は四つ挙げています、スライド77です。

1. いわゆる社会関係材（つながり）、人とのつながり（の喪失）、
2. 社会の制度への不信感、Political Efficacy、この政治的有効性感覚というのは、いわゆる自分が参加したことによって何か変えられると思えるという感覚ですが、これがない。
3. 他者との比較文化、あの人のように金持ちになりたいなど、これは
4. の消費主義の考え方に非常に近

いです。この四つがあるから幸福度が上がらないと言っています。

スウェーデンは、もしかしたらこうしたことにならないように対策してきたのではないかと思いました。若者団体に投資しているというのは、人々のつながりをつくる、スタディサークルもそうです。政府の透明度も非常に高いです。市民の声を聞いて生かす、だから政治的有効性感覚も高まるということがこの市民の制度、政策への参画を保障することによって実現しています。それと、平等な価値観、これは北欧的なのですが、出る杭は打たれるではないですが、良いも悪いも含めてそんな目立つ人がいない。そういう民主主義と非常に相性の高い平等な価値観というのを大事にしようとしています。

子供・若者政策でこの消費主義に対抗しました。12歳以下の子供のチャンネルでの広告の禁止措置というのが1991年に起こっています。スウェーデンは子供向けチャンネルとそうでないチャンネルが分かれていますのですが、子供向けチャンネルのところでは広告が全然出てこないのです。こうすることによって子供の消費主義化を抑えたということがあります。

この若者団体に助成金を出していくようになった歴史的な背景も、実はこの消費主義の拡大への対抗だったのかなと思っています。スウェーデンのユースセンターも、支援者と被支援者、サービス提供者とそれを受けるお客さんとサービス化していったという歴史もあったのですが、これをなくそうというふうになった。イギリスではもともとユースサービスと呼ばれていましたけれども、ユースワークという名称になったのはそういう背景があったからです。若者団体の声をすくい上げる仕組みが法的に保障されているから、サービスではないということです。

学費などが無料ということもあって、若者の移行期というのが非常に多様です。大学の平均入学年齢が25歳です。25歳ぐらいまでギャップイヤーです。30歳ぐらいで定職につければ良いという感じのデータもあります。スライド80、81を見ると、学費もかからないので、本質的な価値を考えて自分は何をしたいかなどに向き合える時期に結果的になっているのかなと思っています。

市民社会とか教育、若者政策に投資をしているからこうしたことが可能なんじゃないかということです。

スライド83ですが、「高等教育への支出額の国際比較」で、日本は非常に低いですし、日本は大学・専門学校の学費が非常に高いです。

スライド85ですが、スウェーデン人ペストフの福祉トライアングルにおける第三セク

ターです。この第三セクターというのをやはり厚くしていったほうが良いという話ですが、スライド85、いろいろな国で財政的な比較をすると非常に大きな違いがあるというのも明らかになっています。

市民の高い信頼のもとに民主主義のサイクルというのが機能している。投票すると政策が変わる、政策が生活に直接影響するから社会に参画するという循環。国レベル、地方自治体レベルでも、ユースセンターや若者団体などのいろいろな組織からの声が上がって、それを反映させていく。若者も社会に影響を与えていると実感できるから投票に行く、こういうサイクルが機能していると思っています。

日本に限らず世界的に、今、新自由主義や緊縮財政、先進国の中でもそれが共通の課題として出てきています。その中で、若者支援、若者政策、教育政策、社会保障をどうしていこうかという話があります。この新自由主義や緊縮財政の影響はとて大きくて、日本でもそうですが、ヨーロッパでもこ議論されています。この流れの中で、ユースワーク、社会教育や生涯学習が就労支援や学習支援に傾倒してしまうということを認識しなければいけない。そうしないと、その中で子供・若者の空間や時間は埋もれてしまうと思います。

最近話題になった「僕らが“ちんじょう”したわけ」ですが、板橋区の廃校のグラウンドでサッカーをしていた子達が、工事が始まるということで使えなくなり、サッカーができる場所を求めて陳情したという話ですが、こういう空間をどんどん私たちは失っている。こうしたことでいいのだろうかということです。

また、若者の移行期が多様化したというふうに言われていますが、ヨーロッパと比較すると本当だろうかと思います。人生前半期の社会保障が十分でなく、学費もそうですが、それらが足かせになって自分のやりたいことにチャレンジできない人がたくさんいます。あるいは、日本だと妙な年齢主義があつたりするわけです。若ければ若いほうが良いとか、大学は何歳で出てすぐ就職しましょうなどと親の世代などに言われて、とりあえず進路を決めるということが起きるわけです。性差別もそうです。消費主義化は手つかずですし、主権者教育も、政治の中立性などを学校の中で保つのは難しいからという課題があります。こうしたことが今の日本の若者の状況を導いた原因にあるのかなというふうに思っています。

子供・若者の声を聞くというのは、形骸化しがちになっていて、「子ども・若者の参加」を促進するというだけではなくて、参加した結果の社会への影響力を見るということをお大事にすること重要だと思います。

影響力を高めるために、移行期、市民社会への投資がもっと必要ですし、若者団体への助成金や声を聞く仕組みなど、スウェーデンでやっているようなことを部分的にでも取り入れていく。主権者教育も、投票率ばかり上げるとかではなく、使える民主主義を教えるということをやらなくてはいけないと思っています。そうすることが、いわゆる本質的な価値を追求したその結果として、こういう社会に住みたいということを言える若者たちを育てて、その若者たちに社会をつくっていく意思決定をしてもらって、持続可能な社会ができていくのかなというふうに思っています。

以上、駆け足でしたが、これで終わりにしたいと思います。御清聴ありがとうございました。

【笹井会長】 両角先生、ありがとうございました。

これから、質疑応答、意見交換をしたいと思います。どなたからでも結構です、いかがでしょうか。

【林委員】 基本的なところで教えていただきたいのですが、若者団体というのと若者がたくさん入っているという協会とクラブ活動というのは、重なってくるものですか。活動内容も、先ほどの若者団体の内容、出てきたものがそのまま協会とかクラブ活動の内容となるというふうに解釈してよろしいですか。

【両角先生】 はい、そうです。明確に線引きができていないようです。やはりこういう分野というのは、線引きが難しい。スウェーデンでも、クラブ活動とかサークル活動をやっていて、そこが若者によって多く占められている場合を若者団体と呼んでいるようです。協会とクラブ活動という二つの言葉もスウェーデンだと同一のものという解釈でいいです。

【野口委員】 ユースセンターの運営者は誰ですか。

【両角先生】 市ですね。市の子供・若者局とか、文化芸術とか、いろいろな分かれ方がありますがけれども、そこが一応持っていて、そこを公設民営という感じで、入札をかけて、NGOなどに民間委託みたいなことをやっているところもあつたりします

民間委託の割合はちょっと分からないですね。ですが、民間委託でもそうでなくても、内容はほとんど変わらないです。ちょっとおしゃれになるぐらいですね。

【酒井副会長】 基本的に70パーセントぐらいの人が参加しているいろいろな活動というのが、どのぐらいの頻度でその方たちは活動されていますか。例えば1週間、あるいは1月の間にどのぐらい……。

【両角先生】 週何回は分からないのですが、基本的に、ユース世代、いわゆる高校生ぐらいだったら、放課後になりますし。大学生とかになると、もうそこでインターンとか、そこで働いているということもあります。あとは仕事後とかです。

【酒井副会長】 学校は比較的早く終わって、日本でしたら部活動をやっている夕方の時間が割合地域のそういうユースワーク、その地域のクラブ活動みたいなところに参加していくというイメージですか。

【両角先生】 そんなイメージで良いと思います。部活動がなくて、学校は5時で閉まるので、アイスホッケーなどの習い事へ行く人が多いのですが、行先のメニューの一つにユースセンターとか若者団体とかが入ってくるという感じです。

【笹井会長】 日本では他者と触れ合うということが苦手だという学生が増えているというふうに私は認識しているのですが、スウェーデンはその辺はどうなのでしょう。

【両角先生】 最近になって Hikikomori Uppsala という団体ができたのです。ひきこもりというのは、国際的な言葉になったらしいので。そういう人たちへの認識というのも広がったのかなと思う一方で、データはないので僕の雑感ですけれども、非常に少ないのではないと思います。自分の意見などをちゃんと伝えるという教育を小さいときからやっているのです。保育園のときから、何で遊びたいのとかなど意思表示をちゃんとするという、その教育を徹底しているというのがあるので、そういう人は少ないかなと思います。

【笹井会長】 それからもう一つ、日本の若者はコミュニケーションツールとしてスマートフォンを圧倒的に利用しているのですが、スウェーデンはどうなのでしょう。

【両角先生】 多分スマホ普及率は同じぐらいだと思いますが、パソコンの所有率が高いので、ITスキルは高いです。スウェーデンはゲーム大国なので、ゲームにのめり込んじゃう人も多いです。割と最近ヨーロッパでは、オンラインユースワークとかデジタルユースワークという、フィンランドにあるのですが、ゲーム機器しか置いていない、ゲームセンターのようなユースセンターがあります。そういうユースワークが今広がりつつあります。ゲームは個人でできるので、引きこもってしまう。なので、個人で完結させないで、場所に来てもらって交流を促すということをやっています。

【永島委員】 若者団体がすごく盛んと言われているのですが、若者団体が潤沢にあるからそっちを選択するということですか。どういうふうな感じで参加できるのですか。

【両角先生】 まず、塾がほとんどないです。中・高生とかになると、放課後は学校から追い出される。小学校とかだったら学童とかはあるのですが、中学以上とかになると、

ユースセンターとか、あと習い事とかになります。基本学校にはいられないという認識です。学校の先生の仕事の範疇じゃないということで面倒を見てくれない。だから、圧倒的に可処分時間があるということが若者団体が盛んである理由の一つにあると思います。

若者団体には、みんな気付いたら入っているというぐらいです。大学のサークルのようなイメージで良いと思います。

費用は発生しないです。年会費を取るところもあるのですが、政党青年部なども年間500円とか、初年度無料などというふうにしていますし、ユースセンターも基本的にはお金を取ってはいけないというふうになっています。お金を取ることによって参加ができない人というのがいる状況をつくらないようにしています。

【永島委員】 その運営費は全部国からでているのですか。

【両角先生】 ほとんどがそうです。個人がお金を負担することがないですね。あと、若い時期に学資援助みたいなのがあって、国からお小遣いが入るのです。経済的な負担によって、勉強も含め、そういうあらゆる活動ができないことが非常に少ないと思います。

【広石委員】 移民の人たちのインクルージョンというか、移民の子供たちのこうした活動への参加についてどういうふうな感じだと捉えていらっしゃるのでしょうか。

【両角先生】 特にスウェーデンに限らずヨーロッパだと、都市と郊外、あと町ごとの隔離化が非常に大きくて、同じ民族だったりとか宗教的バックグラウンドを持った人たちが集まる地域があったりします。

その結果として、例えばシリア難民が来たときに、シリアの子供たちが集まる地域とそうじゃないところというのが分かれたりするのです。その結果、そこはもうアフリカ系とか中東の難民の子供たちと若者しかそのユースセンターには来ないとか。むしろその地域全体がそういう人たちしかいないというふうになっていて、地域差が非常に大きいです。

なので、そうしたユースセンターでは、音楽制作とか、あとペイントとか、そういうものよりも、もっとアグレッシブなスポーツをやったり、例えばボクシングジムがあったりしていて、活動のメニューが若干変わったりするのです。

スウェーデンでは、8割、85パーセントの若者は投票していますが、15パーセントは行っていないわけです。その15パーセントの人たちがやはりユースセンターに行くような感じのイメージです。もともと誰でも来て良いというふうな場所だったのですが、地域の隔離化だったりとかがある中で、お金がある人たちは習い事に子供を行かせたりとかするのですが、移民の子供たちがいきなり若者団体に入るというのはやはりハード

ルが高いわけです。そもそもスウェーデン語を話せないのです。でも、スウェーデン語を学びたいというモチベーションもない。そして、行くところがないと、例えば車を燃やしたりとかで遊んでしまうので、頼むからユースセンターに来て一緒に遊ぼうぜという感じですよ。

【広石委員】 僕も、ちょっと前、デンマークのフォルケホイスコーレへ行ったら、移民のための語学学校の機能がすごく、移民の言語獲得に対応するというのは緊急度が高いのです。移民問題に関する緩衝材として、とにかく母国語を学んでもらうということが、すごく重要な今はアジェンダだと思うというようなことをおっしゃっていました。やはりその辺もテーマだと思ったのですけれども。

【両角先生】 一方で、ユースワークはそればかりじゃないというのも、この両義性の中でやはり揺れているのかなと思います。

【土屋委員】 欧州ユースワーク大会宣言の比較考察というスライド15のところ、ユースワーカーの形態が、第1回のほうは有給ワーカーとボランティアという形になっているのですが、第2回のところでは被雇用、フリーランス、ボランティアというふうになっていて、このあたりの違いというところが気になるのですが。

【両角先生】 フリーでもやっている人が出てきたのだなという認知だと思っています。ここで言うフリーランスのユースワーカーというのは、例えばEUレベルだと各地でユースワークの研修があるのです。僕もスウェーデンから参加したことがあって、ドイツでやったのですが、その研修では、EU国内10カ国ぐらいからいろいろな人が2泊3日とかで参加していました。そこでファシリテーターとかをやっている人、そういう人たちはフリーのユースワーカーなのかなと思います。だから、若者を直接支援というよりかは、間接支援的な感じでやっている人たち、研修などもできるような、そういう人たちはフリーで入れたりするのかとか。あとは雇用形態ですかね、もう少し調べる必要はありそうです。

【松山委員】 若者団体や政党の青年部の活動と、ユースセンターは、両立しているようなものなのか、あるいは、政党の青年部とかに入っている人たちじゃない人がユースセンターに行くのかとか、その辺のイメージがつかめないのですが。

【両角先生】 活動のメニューの一つだと思ってもらって大丈夫だと思います。ユースセンターに行く若者だけじゃなくて、政党青年部にも行く若者もいるということです。両立してやっている人もいるかもしれませんが。

【松山委員】 居場所の在り方がいろいろ多様で、その一つユースセンターであり、政党青年部とかでバリバリやっている人もいるということですか。

【両角先生】 組織型の活動に参加する人とか、施設基盤型、施設に行く型だったりなど、いろいろなメニューがある中の事例の一つという感じです。総体で見たときの若者の中の活動のメニューです。

【松山委員】 ユースセンターのほうは、運営形態としては、先ほど公設民営みたいなことをおっしゃっていたのですが、ほぼ税金で賄われている運営の形態であって、NPOみたいなものもあっては、全然これとは別ですか。

【両角先生】 公設民営の中にNGOがやっている場合もあります。大体がそうですね。

【松山委員】 でも、その運営形態というか、財源は国ですか。

【両角先生】 基本的に国か地方自治体です。

よく日本の人と一緒に行くと、「お金はどうしているのですか」となるのですが、「あ、国からもらっています」、「自治体からもらっています」、全部それで終わりです。先程のフリースヒューセットは、寄附が6割か7割ぐらいという施設です、これは珍しいのですが。スウェーデンのそれ以外の若者団体もそうなのですが、NGOとかは基本的に公からお金が入ってきています。そのぐらいの財源がついていますね。生徒組合に3億円ですからね。

【青山委員】 去年、私も一緒にスウェーデンに行かせていただいているのですが、このスライド15のさつき土屋委員がおっしゃった第1回、第2回の表と、それから50ページに「スウェーデンのユースワークとは？」というスライドがあります。ちょっと基本的なことですが、この会議の中でもユースワークというのが一つのキーワードになっているときがあるのですが、例えば、施設がやっていること、いわゆるユースセンターがやっていることと、それから若者団体がやっていることもユースワークと呼ぶのかどうか、ということです。就労支援はユースワークに入ってくるかどうか、サポステのようなものも入ってくるかどうかといったときに、何のことを指して「ユースワーク」という言葉を使っているかというのが、よく分かっていなくて、そこを1回確認しておけると良いかなと思ったのですが。

【両角先生】 スウェーデンでは、例えばユースセンターで働いているとされる余暇リーダーの本来の役割は、若者団体とか、そういう協会活動のリーダーを務められる人という役割が期待されてできたのです。ですので、例えばユースセンターとかで働いていても、

組織活動につなげようとするというのはあるのかなと思います。そういう意味で、スウェーデンにおいては、ユースワークの概念の中に若者団体も入ってくるのかどうかという感じですか。

【広石委員】 スライド42の図の赤い点線というのはどれぐらい、社会的コンセンサスなのか、それとも割とこれは両角さんの定義なのかとか、その辺はどう思いますか。

【両角先生】 これは僕の雑感です。北欧におけるユニバーサルなユースワークという話をするときには、ここも入っているのかなと思っています。ヨーロッパ的に最近で言うユースワークというのはプロがやるもので、困難を抱えた人たちを対象にやるものというふうになっているけれども、日本でも以前は、グループ活動なども入っていたという認識ではあるので、ユースワークの歴史というのを見ていく中では、ここも入ってきてもおかしくないのかなというふうに思っています。

【青山委員】 かつて、いわゆる「アルプマール報告」が出された時期のイギリスでは、「ユースサービス」という言葉もあって、「ユースサービス」が若者、青少年施策全般を指すような使い方をされたこともあるし、「ユースワーク」という言葉は、ユースサービスに近い意味で使われることもあれば、ユースワーカーがするワークそのものを指す場合もあったと思います。後者だとすると、ユースワークというのは、そのワーカーがいる施設で行われるワークですよね、支援事業全般をワークと指すというふうな言い方の両方があるような気がしていて、今ここで我々が何となくユースワークとキーワードに出すときに、どこまでを含むかを。何か両方あるような気がしているんですよね。

【両角先生】 そうですね。

【青山委員】 このEUのスライド15の表を見ると、何かかつてのユースサービス全般に近いものも含まれるようにも見えなくもないし、入らないのかもしれないというところが少し気になりました。

【両角先生】 例えばどういうところがかつてのユースサービスっぽい感じですか。

【青山委員】 例えば就労のこととかも出てきます……。でも、連携先なのか。

【両角先生】 若者対象像のところ、第1回のほうだと「若者集団」というふうに言ったりもしていますが。個別支援と集団の支援というものをもしかしたら分けている可能性もあるのかなとちょっと思ったりもしました。

【青山委員】 逆にここを踏まえれば、若者団体の支援はまさにユースワークそのものだというふうには言えますね。ミクロの場面でのワーカーの働きかけも、制度的な意味で

のバックアップも、両方を含めて——広義の、狭義の、と区別できるかもしれないけれども、ユースワークに入ってくるという理解で良いのかなと思いました。

【土屋委員】 こちらの第2回欧州ユースワーク大会宣言の中に書かれているところ日本に置き換えると、ソーシャルワーカーがターゲットとするような部分が入っているのではないかと、個人的に感じます。私の考えるユースワークは、どちらかというとな北米のユニバーサルなイメージ、今日、両角先生がお話くださったようなことがユースワークではないかと考えていたのですが。私自身はこれまで、スクールソーシャルワーカーをやってきましたが、スクールソーシャルワーカーとしては、実際にはユニバーサルというよりも、ターゲティング、つまりこちらの大会宣言に書かれている内容に近い動きをしてきましたので、ヨーロッパのユースワーカーも、困難を抱えた若者を対象にする方向に寄ってきているというところは、新鮮な発見でした。なので、ここで言うところのユース——まあ、ユースソーシャルワークということは今東京都で進めているわけですが、何かそのあたりの整理が、今、青山先生がおっしゃったような整理も含めてどうしても必要になってくる。私の中でもそうですし、この会議の中でももしかしたら必要ではないかと思っています。

【両角先生】 そうですね。多分ユースワークで無理にやった感じはありますよね。ただ、ニーズとしてはもちろんあるからというのもそうなのですが、一方で、それで良いのというふうに思っているかどうかというのがちょっと見てみたいところですね。

【笹井会長】 学校教育はシステム化されているからそれ自体求心力を持っているのだけれども、社会教育は無限にあるのですよね。だから、実践するその営みそのものを見て、これは社会教育、これは社会教育じゃないという話になると思って。ユースワークもそういうところがあるのではないかと思って話を聞いていたのですね。だから、やはりノンフォーマル教育じゃないとできないのだろうなと思いました。システム化されたいけないのですよね。

【両角先生】 社会教育、つまり青少年教育ですよ。社会教育の中でも成人を対象にしない青少年を対象にした社会教育がユースワークという整理であるなら、もちろんノンフォーマル教育というふうになりますし、学校教育や就労とかでもそうですけれども、そっちの制度化されているほうの指標で見ると合致しないことというのはよくあることなのかなと思っています。それを無理してやろうとすると変な方向にいくと思うのですが。

【野口委員】 ユニバーサルな施策にしていくことが大事だというお話だったと思うの

ですが、一方で、ターゲット化の方向性に今なっているというところで、実際に私が対象としている方が、非行だったりとか、障害があったりとか、そういう方たちを対象にしていると、対応も大変だなというところがあります。「誰でも来ていいよ」と呼びかけながら、対応が必要な子たちについては、専門家と連携しているのか、ソーシャルワーカーと連携しているのかというような点はどうか。そういった子たちも団体に参加できたりとか、ユースセンターでは配慮が受けられたりとか、どういう取組がなされているのかを知りたいです。

【両角先生】 ユースワーカーの範疇、余暇リーダーの範疇はここまでというのがあるので、その範疇を超えるものについてはソーシャルワーカーにつなぐことになっています。ユースセンターは基本的に市の運営ですので、市で雇われているソーシャルワーカーにつなげられます。

【野口委員】 発達障害があったりなどする子は、ハードルが高いのかなとも思ったりするのですが、結構参加しているのですか。

【両角先生】 ハードルは高いと思います。基本的にはやはりやんちゃなアフリカ系の若者たちがたくさん来ています。彼らもスウェーデン語ができないというハンディキャップがあるので、ある意味、オープンなのですが、やはり集まってくる地域性などの影響もあったりして、同質性の高い空間になっていく、いわゆる居場所の問題みたいなのはあるのかなというふうに思います。

【酒井副会長】 自分も若者施策というと就労と教育というところでどうしても考えがちなのですが、政治参加というところはかなり重点が置かれていて、この政治参加が学校教育の活動の中からずっと積み上げで来ていて、それが様々なアソシエーションとかユースセンターの活動につながっていくという、そんなイメージですよ。それで、非常に若い政治家が生まれていくという、そういう社会のシステムがある。

日本ですと、学校は、政治からできるだけ遠ざけていこうという基本的な考え方があるって、特に高校生の政治参加というのは、60年代の高校紛争のときにそれがかなり禁止されたという歴史があります。

スウェーデンでは、どうしてそういう形で学校教育においても若者施策においても若者の政治参加を積極的に支援していくという考え方になったのかなというのはお伺いしたいのですが。

【両角先生】 日本では、当時の文部省の69年通達で、高校生の政治活動の実質的な

禁止をしている。それが日本で大きかったのかなと思います。スウェーデンはそれがなかった。

スウェーデンではスタディサークルの勢力がとて強くて、しかも政治的なのです。スライド74にスウェーデンにおける民主主義の成立の歴史というスライドがあるのですが、19世紀末の国民運動の盛り上がスタディサークルにつながり、そのまま社会の一つのシステムとして根付きました。普通選挙権の導入を主導したり、図書館をつくろうと活動したり。現在もスタディサークルは10種類ぐらいあるのですが、政党と結びついているスタディーサークルがあつたりするのです。そういう意味で、教育の政治的な中立性とかはどうなのとか思うのですが。例えば、社会民主党の持っている施設、そこには社会民主党と結びつきが強い学習協会があるのです。なので、政治には何か触れざるを得ないみたいな感じはあります。50～60年代にユースセンターがどんどん設置されるのですが、こうしたスタディサークルの動きがあつた上で若者団体があるという感じです。

だから、この教育でそうした活動を禁止するということは、スタディサークルの活動をなくす、イコールスウェーデンをなくすみたいなことになってしまう。そのぐらいこのグループ活動がアイデンティティーのようになっているのかなと思います。

【広石委員】 今の話は、スライド9の「欧州委員会が考える、若者の社会参加が必要な理由」にあるのですが、欧州議会の提言では、民主主義教育をして市民教育の経験をさせないと暴力的な活動がすごく増えるというリスクがあるとされています。日本の人は、割と政治に参加させなければ何か抑え込めると思っているというか。向こうは、15歳になったら家を出て外で活動し始めたりとかすると、極端な場合、ホームレスになったり、イギリスの政策でも課題になりましたけれども、そういう若者たちが暴動を起こすのではないかと危惧して、政治的にインクルージョンしておいたほうが良いというEU的な価値観が多分あると思うのですよね。

【酒井副会長】 参加させておかなきゃいけないというのはあるでしょうね、多分。

【広石委員】 この間、授業で慶應の学生に「自分は大人と思うか」と聞いたら、「大人じゃない」とほとんどの学生が言うのです。「何で大人じゃないのか」と聞いたら、「就職してないから」とほとんどの子が答えるのです。「でも、みんな選挙権持っているよね？」と話をしても、「いや、それは別に」と答える。22歳になって就職をすると自分は大人で社会人。でも、選挙権が18歳で持っていたとしても、それは大人の証じゃないというところが、「そこは考えどころだね」という話を授業で言ったのです。何かそうか

とすごく思われるところがあって、それがすごく消費文化——消費文化が全てじゃないのですが、やはり経済的なものがすごく価値としてあって、投票権を持つということの意味みたいなものが意外と抜け落ちちゃっているのだなというのは発見でした。

【両角先生】 スライド19の「スウェーデンは進歩的な価値観が強い国」この図ですが、これの横軸の左側が生存的価値観なのですよね。つまり、日本は、やはり社会参加となるときに、もちろん経済的な自立、企業社会人になるということが大人になるというふうに考えられているというのも、社会の観念上そうなっているのかもしれないですけども、まず経済的自立を重視する。左の生存的価値を重視するというのは、飯を食う価値観、そんなイメージです。この右のほうになると、解説が書いてありますけれども、「環境保護や外国人、ゲイ、レズビアン、男女平等への寛容性が向上し、経済・政治における決定への参加欲求の高まりに対して高い優先順位を与える」とあるのですが、先進国の中でもこれが低いのかなと。これもあるのかなと思いますね。

【青山委員】 この自由主義的な先進国の中では最下位に近いということですかね。各国の状況が全部分かっているわけじゃないのですが。

【両角先生】 そうですね。これが何で生じたかと。いわゆる若者の自立というのがやはり何かに偏ってきちゃったということなののでしょうか。

【主任指導主事】 ユースワークの中でも若者、比較的年齢の低い世代がユースワークの理事とかされているのですが、世代交代はどうしているのですか。

【両角先生】 その質問を待っていました。その対策はできているのです。助成金の話をしましたけれども、助成金を出す団体への条件の中に年齢があるのです。おもしろいのは、例えば全員20歳以下というふうにしているわけじゃなくて、16歳から25歳の人が6割の団体というのを優先するという感じです。だから、25歳以上の人もいて良いのですが、「4割以下に抑えてね」という感じで団体の若返り化を図りつつも、多様性も保ち、引き継ぎもできるようにしています。

【林委員】 社会参加とか政治参加というのを考えたときに、今日のお話を伺っていて、家庭の影響力というのはすごく大きいんじゃないかなというふうに感じたのです。スタディサークルともつながってくる部分があるかもしれませんが、そのあたり、家庭の影響力が出ている部分というのはあったりするのですかね、調査されて感じる部分がありますか。

【両角先生】 スウェーデンはあまり家庭主義ではないので。例えば社会保障も個人を

ベースにしているのです、どんな状況になっても。例えば子供の相対的貧困率の低さなどもそうですけれども、基本的に母子家庭であっても生活に困らないのです。家庭が成育環境に与える影響というのをできるだけ少なくしようというのはまず前提としてあるかなとは思いますが。

その上で、例えばスタディサークルもそうですし、例えば投票率もずっと高い、若い人も高いです、ずっと高いからみんな行くのですよね。習慣がうつっていくみたいな感じで、文化が継承されていくみたいなのが社会単位で起きているのかなというイメージです。

【笹井会長】 スウェーデン人のロック歌手でマイア・ヒラサワという人がいるのです。彼女のお父さんは日本人なのですよ。彼女のインタビューとかを聞くと、スウェーデンは学校教育とかがすごくおらかだと言うのですね。日本はすごくみんな高校の友達とか窮屈そうみたいなことを言っているのですが、そういう印象があるのでしょうか。

【両角先生】 風通しは良いなというのはよく聞きますね。みんなわいわい手を挙げて積極的かという、そうでもないのですが、静かにみんな手を挙げていますね。静かにこういうふうに待っているのです。それで授業が進んでいくのですよ。だから、発言するし、人の話も聞く、そういう場づくりができていますかね。学校の中が安心できるかどうかというのをやはりすごく重視しているので。一方でいじめ問題とかもいろいろあるのですけどね。

【青山委員】 もう一個よろしいですか。例えば、参加という言葉は使わなくて影響力という言葉がありましたけれども、日本的な文脈で考えると、包摂とかという言葉を使うと、ここでの移民の統合といった文脈ではなく、いわゆる体制・反体制という対立軸の中で、行政による上からの包摂と、それに対する運動といったような議論が多かったので、必ずしも適応を促すことが望ましいとされないこともあったと思うのですが。スウェーデンだと、統合と言うし、包摂と言うし、社会的な防衛というか統治機能を強めるための若者支援の意義がきちんと踏まえていると同時に、一方でグレタさんみたいな人が登場してそれが応援されるといったような、何か日本の社会教育の議論でずっと影響力を持ってきた対立軸とは違うところで議論が展開されているように見えるのですが、そのあたり、スウェーデンではどう捉えられているのでしょうか。

つまり、体制と反体制とか、右や左やという文脈が強かった日本の社会教育の領域では、包摂とか適応という文脈と、そこに物申して若者が対抗的な価値観をぶつけていくという動きが、対立的でなく同時に生じていて、しかも双方の意義が認められているということ

が、何かすごく真っ当だなと思うのと同時に不思議でもあるのですが。

【両角先生】 おそらく一貫しているのは個人が社会的な影響力を高めるというだけで、そのロジックで通っているのかなと思っています。だから、対抗ありきじゃなくてという。

【広石委員】 僕が誇りと感じるのは、税金を払っても、「だって、ちゃんと教育も医療も無料なのだから、25パーセントとか消費税を取ったって良いじゃん」みたいなことをデンマーク人の人はみんな言うわけですね。そういうことに対する信頼みたいなものの、すごくそれがあるようには思うのです。そこが日本と多分違うというか。

【両角先生】 政府への信頼は非常に高いです。先程のスライドに出てきたミックという僕の友達「税金払っても良い」と言っているのですが、スカンジナビアモデル、スウェーデンの政治に対してすごく不満はあるとは言っているのです。

それで、いろいろな国際調査でも、税金を払うとか教育無償化はどう思うというので、やはりそうしたほうが良いというふうに答える人の割合が非常に高いというのがあったりするのです。だから、その時点で多分、ちょっと反体制みたいなもののあれがもっと中和された状態というのがまずベースにあるという点で、やはりこの文脈の違いがあるのかも。分からないですけども。

【広石委員】 アメリカでも、共和党、民主党はあっても、何か法の支配に対する信頼みたいなものは絶対みたいなものがあって、正統的な主義主張の違い、どっちに賛成・反対とか、グレッタさんが良いとか悪いという議論があっても、こういう社会システム自体に対する信頼みたいなものが多分すごくあるような気はしますけどね。

【土屋委員】 スウェーデンの教科書を読むと、人権の尊重ついて、小さいときから勉強するように思えるので、そういうのもベースにあるのかなと思ったのですが。

【両角先生】 そうですね。それがちゃんと現実化しているという点が、スウェーデンとアングロサクソン系のアメリカやイギリスとかと違うのは、民主主義が経済的にもちゃんと保障されているという点で、やはり北欧と今差が出てきているのはありますよね。だから、理念だけじゃないという意味でということですね。

【笹井会長】 ありがとうございます。非常に懇切丁寧に御説明いただきまして、ありがとうございます。非常に参考になりました。

この辺で議論のほうは締めさせていただいて、3番目、今後の予定につきまして事務局のほうからお願いしたいと思います。

【生涯学習課長】 ありがとうございます。

両角先生にも、大変良いお話、ありがとうございました。

皆さんに活発に御意見いただいて、大変ありがたく思います。

次回の審議会の予定ですが、第5回は来年3月17日（火曜日）ということで、開始が午後4時からということで、御確認をよろしくお願いいたします。

【主任社会教育主事】 次回は、酒井副会長から一応議論の整理を踏まえてということで、学校教育の視点からということに限定はせずに、これまでの議論を整理していただきつつ、学校教育の分野からもいろいろと話題提供してほしいというお願いをしております。

【生涯学習課長】 また会場等詳細につきましては改めて御案内させていただきますので、よろしくお願いいたします。

【笹井会長】 ということで、今日はこの辺でお開きにしたいと思います。皆さん、どうもありがとうございました。

閉会：午後8時02分